

指標名: 転倒転落率

背景

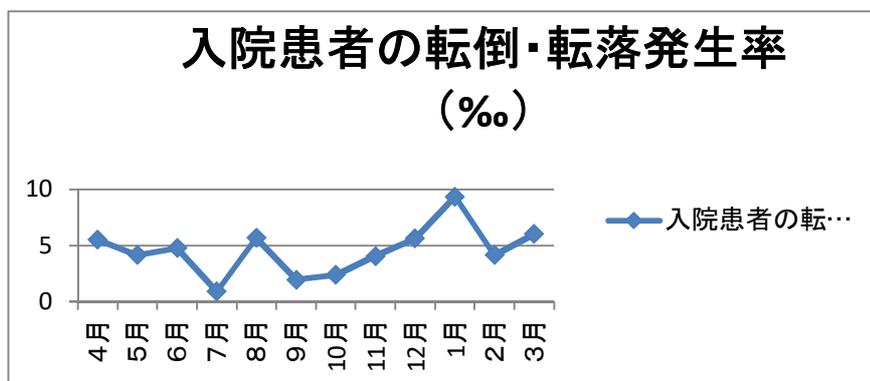
A4病棟は外科系・内科系の混合病棟であり、急性期・慢性期・終末期・周術期など様々な状態の患者が入院され、年齢も高齢者だけでなく、小児も受け入れている病棟である。患者の背景として、認知症患者の増加やせん妄の発症、筋力低下を来している患者が少なくない。このように、転倒リスクがある患者が多くいる中で、離床センサーの設置やベッドコントロール等の対策を行っているが、その中でも転倒・転落が起きることがあり、患者が抗血栓薬を内服していたり、骨粗鬆症があったりするため、転倒・転落が病状悪化の転機になりかねない。これら転倒・転落は、看護師の働きかけにより予防することができると判断するため、転倒・転落を少なくすることをA4病棟の質指標とする。

データの定義

分子: 病棟の入院患者に発生した転倒・転落件数(レベル1-4)
 分母: 1ヶ月間の病棟の在院患者延べ人数 × 1000(‰)

2018年度のデータ

| Nursig Indicator (看護指標) | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 平均 |
|---------------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 入院患者の転倒・転落発生率(‰) | 5.50 | 4.13 | 4.78 | 0.89 | 5.68 | 1.96 | 2.38 | 4.05 | 5.63 | 9.35 | 4.15 | 6.02 | 4.54 |
| 分母: 1ヶ月間の病棟の在院患者延べ人数 × 1000(‰) | 1272 | 1212 | 1254 | 1239 | 1232 | 1023 | 1258 | 1233 | 1244 | 1283 | 1204 | 1330 | |
| 分子: 病棟の入院患者に発生した転倒・転落件数(レベル1-4) 転倒転落数 | 7 | 5 | 6 | 1 | 7 | 2 | 3 | 5 | 7 | 12 | 5 | 8 | |



参考データ

2016年 5.06(2017年1月開始)
 2017年 4.07

評価

全体的な数値としては、前年度の数値を上回り、4.54と目標値であった4.00が達成できていない。今年度も安全委員により転倒転落のIA分析実施している。月により転倒件数にもばらつきがあるが、件数の多い月に関しては、泌尿器科の癌で終末期のせん妄症状が強くてきている患者で、離床センサーを装着していたのにも関わらず、繰り返し起こっている転倒が多かった。終末期の患者には、なるべく離床センサーや身体拘束をつけずに、安楽に本人の自由に動きたいという気持ちを尊重して関わりたいという思いもあったため、頻回な訪室や、ナースステーションの近くの部屋に入室してもらうなど配慮はしたが、間に合わず転倒されていた。前年度は離床センサーや身体拘束をしていながらも、それらの不備(スイッチが入っていなかったり、抑制方法が統一されなかったり)起こっていた転倒転落が多かったため、今年度は安全グループにより、離床センサー、身体拘束の方法を周知させる勉強会が実施された。そのため、同様の原因から起こる転倒転落は減少した。離床センサーへのナースコール対応に関して、申し送りの際に必ず離床センサーをつけている患者の名前を皆に周知し、皆で協力して早急に対応できるように取り決めた。しかし、スタッフ一人一人の業務量も多く、なかなか他スタッフの部屋のナースコール対応をする余裕もないのが現状であった。前年度は睡眠剤内服後の転倒が多くみられたが、睡眠剤に対するスタッフの意識も高くなったためか、睡眠剤を内服する患者が減少したせいも、同様の転倒は減少した。今年度の新たな転倒転落の経口としては、昼休憩交替中の転倒の件数が多くみられた。来年度は昼休憩交替中の対策について考えていく必要がある。来年度も今年度の転倒転落の内容を分析し、新たな対策を考え実行していかなければならないと考える。

参考文献

初雁卓郎ほか: ベッド上の患者行動を推定・通知するシステム「離床CATCH」の提案. 労働科学. 88巻3号. P94～102

森田恵美子ほか: 転倒アセスメントスコアシートの改訂と看護師の評定者間一致性の検討. 看護学雑誌. 61巻1号. P35～42